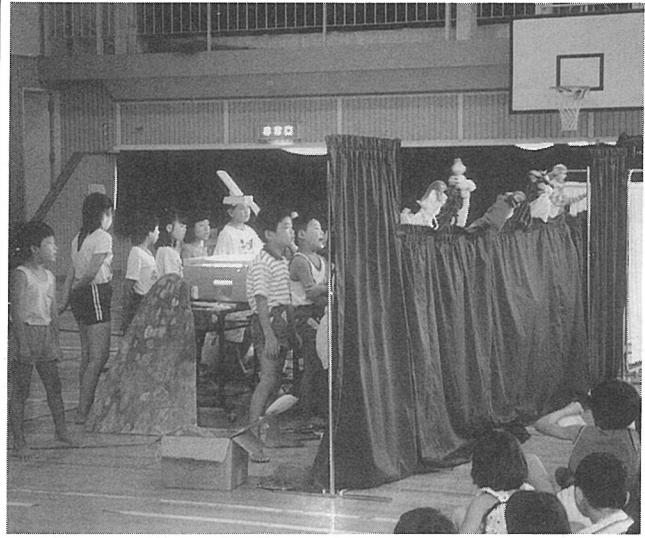




発行所  
飯田市竜丘公民館  
編集人  
竜丘公民館広報委員会  
印刷所  
龍共印刷株式会社  
上郷町黒田 電話22-5353

人口 6,336人  
男子 3,045人  
女子 3,291人  
世帯数 1,785戸  
(2年10月末現在)

# 国・言葉の壁を越えて 人形劇カーニバルの夏'90



熱演する丘の子劇団の皆さん

八月二日から五日まで人形劇カーニバルが開催され、市内各地域の集会所や公民館で公演が行われ、多くの市民が人形劇を楽しみました。年々多くの人達をまきこみながら地域づくりの一環として定着してきており、大きな盛り上がりを見せています。今年も五日、竜丘公民館にソビエトのキエフ国立人形劇場が訪れ、公演を行なった後、昼食を取りながら交流会が行なわれ言葉を超えた交流がにぎやかに行なわれました。

八月二日から五日までの四日間、十二回目の人形劇カーニバルが開催されました。このカーニバルも完全に飯田の地に根をおろし、地域づくりの一環としての位置づけがなされるようになってきました。

特に二年前の世界フェスティバルと前後して、多くの外国の劇人達が飯田を訪れるようになり、より私達地域住民の間に定着し、数多くの人形劇サークルもでき、地域づくりの中で定着してきたようです。今年も我が竜丘地区においても、早くから公民館の文化活動の一環として取り

組み方が話し合われ、地域住民の多くをまきこみながら徐々に盛り上がりを見せてきました。そして八月二日から五日までの間、様々な劇人達が各地域の集会所や公民館で人形劇を上演し、子供からお年寄りまで多くの人がそれを心で打たれたり、声援を送ったりと、演じる側と見る側とが一体となった公演が行なわれました。

また、外国からのお客様としては、遠くソビエトから「キエフ国立人形劇場」の人達が五日の午前中竜丘公民館で上演を行ないました。

この日、十時の開演を待ちきれず、夏休みの子供達や、その父兄、お年寄りまで多くの地域住民が公民館を訪れ、開演を今か今かと待ちわびていました。

時又公民館長がキエフというのはソビエトの中でどこにあるのかを説明された後、いよいよ上演開始となりました。

演目はプログラムでは二つ用意されていたのですが、都合で「コロボック」の一つだけでした。劇はすべて日本語によって行なわれたので良くわかりました。キエフの人形劇団は竜丘が最後の公演地だったので終了後公民館の人達と昼食

の地に根をおろしたカーニバルですが、今後はどのように進んでいくのでしょうか。飯田でも地域づくりの一環として、なくてはならないものですが、より一歩進んで人形劇にとって飯田という地を無くしてはならないという位置に置くようには考えていけないのでしょうか。たとえば飯田人形劇ライブラリーといった人形劇の資料館作りはどうか。この資料館で人形劇全般に関する情報交換のセンターを作り、多くの台本を集めたり、その著作権の管理を行ったり、パソコン通信などを利用して全国の人形劇団がこの資料館を中心に様々な情報交換が行なえる様なれば、人形劇における飯田の位置づけは不動のものとなると思えます。今後地域に根ざしたカーニバルが続いていく様にもっと多くの人が人形劇を楽しみながら、参加し作り上げていきたいものです。

を取りながらの交流会が行なわれました。最初は言葉の問題があり少し堅さもありましたが、さすがに世界各地を歩いている人達だけあってすぐ打ちとけて、こちらからロシア民謡を歌ったりして言葉の壁を越えて大変盛り上がりを見せ、有意義な国際交流の場となり、心が通じれば言葉はいらないという事を多くの人が感じました。

## クラスが丸となり

三年一組丘の子劇団

第十二回人形劇カーニバルが、八月二日から五日までの四日間にわたって開催され、竜丘小学校体育館では「丘の子劇団」による公演が行なわれた。

「丘の子劇団」は竜丘小学校三年一組の三十六名がつくる劇団です。

三年一組では、年間五十分間あるクラス時間を、クラスが一体となって取り組む活動(中核活動)と位置づけ、毎年四月に年間の活動を話し合ひで決めていくそうです。一年生の時は創作、二年生の時は野菜ランド。今年も昨年の活動に負けない様な活動、思い出に残る活動にしようと話し合

い。結果、今年の中核活動は、人形劇に決めたそうです。児童からは「全員が力を合わせがんばって最後に握手をして終わりたい」といった意見も出たようです。

## 竜丘再発見

今年も八月十七日、第十三回時又灯籠流しが開催されました。

生憎の大雨の中でしたが、華麗な花火が夜空を焦がして、楽しい夏の夜の祭りが雨の為、仕掛花火が派手なかつた事は残念でした。

さて、この時又灯籠流しは、昭和初期の時又の有志十人程で構成される「時又仏教会」で、修養会を開いた時、昭和三年に「新しい御霊をお送りする灯籠流しをしたらどうか」というのが発端だそうです。

翌年の八月二十三日の盂蘭盆に灯籠流しをする日程が決まり、準備に取りかかりましたが、現在と違い自転車や電車で飯田まで集めたそうです。自転車では灯籠が乗らないので、伊那電鉄の御協力で飯田から時又まで無料で、灯籠を運んで頂いたそうです。

数年後、時又仏教会から

今年も八月十七日、第十三回時又灯籠流しが開催されました。

時又商工会主催に移り、昭和十二年納涼花火大会が中日新聞共催で行なわれ、灯籠流しと併せて、現在の形が出来上がりました。

しかし、戦時中は止むなしく中止しましたが、終戦後再開され、昭和二十四年には、万灯も加え流し始めました。昭和三十六年に飯田市で初めて予算づけされ、年毎に見物客も増してきました。

昭和五十五年飯田市の三大祭りの一つとなり、日程も八月十七日に変わりました。

この頃から、花火を打ち上げる場所も徐々に南下し始め、天竜橋上流の仕掛花火はなくなり、橋を中心に花火を見たのも、遠い音の事に思われます。

又、数年前より芸術花火として国内の有名な花火師の競演も、灯籠流しの中で一つの名物となっています。

今年から開港した、新時又港により、川の両岸の堤防しかなかった見物場所も広くなり見物人の受け入れ体制も充実してきました。

最近では、雨に悩ませられていた時又灯籠流しですが、市田灯籠流しとお互いに競い合いながら、盛大な夏の祭典に発展する様に期待したいと思えます。



## 熱戦続く

### ソフトバレー大会

去る七月八日に、常会交流男女ソフトバレーボール大会が、竜丘小体育館で行なわれました。

誰もが、気軽に参加出来るスポーツとして年々盛んになり、今年の大会は各常会とも技術が向上し、レベルの高い試合が数多く見られ、好プレー、ハッスルプレーが随所に見られました。

ミニソフトバレーは、軽く柔らかいボールを使うため慣れないせい、中には

先日行われた、市民運動会の際の話として、心に残ることを聞きましたので、書かせてもらいます。……その人のお子さんが、区の選手の人として、リレーに出たそう。

大変な活躍で、素晴らしい成績を残したそう。

その時のお父さんは、人知れず、涙を流したそう。果たしてその涙の正体は……

「よくがんばったよな。カゼ気味だったし、マラソンにも出て。あんなに速いとは思わなんだ。ハジをかかにかいと思っちゃった。あんまり子供の事、知らなんだ。久しぶりに感動の涙を流させてもらって、がんばった子供と、子供を走らせてくれた人に、ありがとって言いたい。」

子供との時間をもちた親が多いのが実態ではないでしょうか。そして子供の良い点をほめるのではなく、欠点を指摘するようなこと。教育は学校まかせ、躰は母親まかせ。目に見える結果だけで人を判断する。

「子は親の背中を見て育つ」のも素敵なことだと思います。が、人の手と手で、体と体で、汗と汗で、一緒に体験してみるってことも大切な事ではないでしょうか。

そのためには、時間も必要でしょう。場所も必要でしょう。環境も必要でしょう。それ以上に親の思い入れが必要。

そして、そのお父さんは最後に「これからは、自分の目で子供の隠れた才能を引き出し、伸ばせるようにしたい」とおっしゃっていました。

子をもつ親の一人として、考えさせられる話でした。

△男子の部▽  
一位：上川路、二位：桐林、以下：駄科、長野原、時又

△女子の部▽  
一位：上川路、二位：長野原、以下：駄科、時又、桐林の順でした。

# 戦後の郷土史 館報たつおか200号を迎える!

今回をもって二〇〇号を迎えた館報は戦後四十余年の電丘の変わり来た様をそのまま伝えていく。多くの編集委員達の責任と情熱によって残された歴史の記録は、現在刷版として発刊計画が進行中である。

昭和二十三年三月一日、孤々の声を挙げた「電丘公民館」が二〇〇号を発行する運びになったことを、共に喜びたいと思います。館報を編むに当たっては、古くは久保田経男氏を部長とする青年団員十四名から成る総務情報部によって編集されたもので、初代館長・木下右治氏の「公民館の発展は村民の自覚と協力にかかると」との挨拶からはじまり、褐色の薄紙三枚にわたって、当時の情報部の意気込みが伺われます。以来今日まで、町村合併等で幾多の変遷を経た館報の、極く一面をのぞいて見ると、二十五年には「表裁培管理について」の号外と「表裁培について」の特集号を合わせた、十回及び発行されて、農業立村としての電丘の館報にふさわしい情報提供はじまっています。又、館報はじめて写真が登場したのは二十七年の二七号で、村の記録映画「たつおか村」の一名所として、「港町時又」の天竜橋附近が紹介されています。このように誕生より四十年間、時移り人が交りても「館報電丘」が、ここに二〇〇号という成果を得たことは、歴代の編集委員が、責任と情熱をもって館報発行に献身的な努力をされた賜と、心から感謝と敬意を表したいと思います。

三十一号、六五号は合併第一号として、松井市長の「部落根性を捨てては」との挨拶がトップ記事を飾り、三十二号、六九号より三十九号、一一一、一七号の電報三ヶ村の合併記事に至る間「飯田市電丘版」として発行しています。

このように誕生より四十年間、時移り人が交りても「館報電丘」が、ここに二〇〇号という成果を得たことは、歴代の編集委員が、責任と情熱をもって館報発行に献身的な努力をされた賜と、心から感謝と敬意を表したいと思います。

さて今、二〇〇号記念刷版の発行が、現在の広報委員によって計画されています。

今回も、誠しこまに時を待たずばらしい企画で、その成果が期待されます。

電丘地区基本構想・計画策定のすすむ中、戦後の電丘地区住民の歩みを知る縮刷版が「温故知新」の一助となれば幸いです。

それだけ、この企画には大きな意義があり、編集、発行の任に当たった委員の苦心も多いかと思いますが、歴史的事業とも云へべき二〇〇号記念刷版が、地区住民の協力のもと、実を結ぶことを祈りたいと思います。(電丘公民館館長・田中興)

広報委員会では、二〇〇号発行を記念すると共に、昭和二十三年に第一号が発行された今日に至るまで電丘の歴史の記録として残された「館報たつおか」の縮刷版の発行計画を現在進めています。

終戦後めざましい発展をとげて来た日本、その様な中で私達の先輩達の考え方や生き様はどんな物であったのか、真剣に未来を考え地域と生活を守って問題解決がされて来たのか、多くの教訓を記録して来た館報は数少ない生活の情報源として

## 縮刷版の発行を!!



## 第一号発刊に たづさわって

一口に十年一昔と云うが随分以前の話であります。今から三十九年前当時の電丘公民館報「たつおか」を編集しました。

私が担当したのは昭和二十六年八月発行の二十二号からその年の十二月発行の二十六号迄の五号であり当時の館報が電丘公民館にありそれをみると感無量であり広報委員会から依頼された原稿を書くどころか片端から読み当りが蘇って来ます。

第二回目のお付合は昭和三十一年四月から三十九年三月迄の間に百二十五号から百四十二号迄発行しており

## 電丘村公民館

### 公民館の發足に當りて

曾ては先輩の努力で天下の文化村と鳴らした本村に愈々芽出度萬歳の結成を誓へ今大なる期待のこもりに電丘公民館の開館式を挙げて村に當り認んで村民各位の熱誠に感謝致しますと同時にその経過の大要を御報告申します。

昭和二十一年九月九日教育民生部長から公民館の設置を運籌について次の通牒を受けました。

國民の教育を高めて道義的知識的並に政治的水準を上げ、また町村自治体向上の實際的訓練を興へ、共に科學思想を普及産業を振興するは新日本建設の課題と考へ

電丘村公民館の設置は、國民の教育を高めて道義的知識的並に政治的水準を上げ、また町村自治体向上の實際的訓練を興へ、共に科學思想を普及産業を振興するは新日本建設の課題と考へ

## 第一號

發行人	木下 右治
編輯人	龍 共
印刷所	龍 共 社
發行所	電丘村公民館

## 勉強になった館報編集

一市七ヶ村が昭和三十一年九月三十日に合併しましたが、私はこの時期を前後して公民館報の編集に関係いたしました。当時の館長は桐林の中田美益さんです。

一市七ヶ村が昭和三十一年九月三十日に合併しましたが、私はこの時期を前後して公民館報の編集に関係いたしました。当時の館長は桐林の中田美益さんです。

## 挨拶と抱負

持つて我が公民館の發館式へることは實に嬉し限りであります。此の時に當り小生如き輕輩淺學な者が主事云々重任を負はれること云々とは全く汗顔の極みで暗澹たる思ひをさせられます。茲に公民館の重要性を思へば思ふ程此の部間に携つざる者の力量を考へ、向う皆様の一段の強力な御指導と御援助を得て責務の全からんことを衷心より念願いたします。以上を以つて簡単なが挨拶に代へます。

次に一般的抱負を列記し皆様の何分の御批判を仰ぎたいと思ひます。

A、老若男女が楽しんで館の趣行に添ふ様な氣分を養成する機關になりたい

B、一部の階層と幹部だけの機關となることを避けたい

C、村内での創意、計畫及實際であらう

D、したがつて高貴な品味でもなく、高貴の價値をねらつて文化水準を高めたい

E、以上の目的達成のためあらゆる機軸を駆使して活用するが前提条件を避け、漸進的性質を取りたい

本紙100号を迎える

昭和二十三年三月一日発行

第一号

電丘村公民館

公民館の發足に當りて

勉強になった館報編集

挨拶と抱負

縮刷版の発行を!!

たつおか

1号発行 (昭和23年)

50号発行 (昭和29年)

100号発行 (昭和36年)

150号発行 (昭和52年)

当時の小学校全景

通年保育が開始された桐林保育園

未ぞうの被害をもたらした「36災」

長野原団地 (中央) の1期工事始まる

記念すべき第一号(右)と第100号(左)

# 動き始めた『むとす竜丘』

地区基本構想計画の総論を練り上げることを目的としてムトス竜丘が発足し、活動を始めました。地域の現状や将来展望について話し合いを深めているが、なお地域作りに関心を持っている方々の参加を求めます。

竜丘地区基本構想計画の策定組織内委員会である「むとす竜丘」が、この程発足し、活動を開始した。

この組織は、地区基本構想計画の総論を練り上げることを目的としており、年齢、性別、地区、所属団体等を一切問わずに地域づくりに意欲を持つ地区民を一般公募してつくられた。

自治会委員、公民館企画委員により構成する策定準備会では、昨年から地区の基本構想計画をどのように作っていくのかについて再三論議してきたが、地区の

今後の将来を決めるこの重要な事業では、任期の制約がある役職者だけにとらわれず、次代を担う意欲的な青壮年層の参加が必要であると考えるから「むとす竜丘」の組織化が図られた。

「むとす」とは、「ムトス IIDA」にも言われるように、「何々をセムトスル」という意志、意欲を表現した造語であり、まさにこの組織の趣旨を表す言葉でもある。七月十九日に行なわれた結成委員会では、カタカナの「ムトス」ではイメージが固くなじみにくいとの

指摘があり、会の名称は竜丘独自に平仮名の「むとす」とされた経緯がある。

当委員会は、現在、幅広い年齢層と職業からなる三十五名の委員がおり、毎月五日と二十日に市役所支所で会合を持っている。現時点では、フリーマーケット形式でそれぞれの考えを出し合い、地区の現状や将来展望について話し合いを深めているが、特に各自が現時点で抱えている竜丘への思いを書いたレポートを持ち寄ったところ、地域の現状や課題を鋭くとらえた中

味の濃いものが集まり、委員の関心の高さが伺われた。「むとす竜丘」は、地区協議会も網羅した竜丘地区基本構想計画策定委員会の要の組織として、今後、意欲的な活動を始めようとしている。

尚、中途での加入も可能であるので、意欲を燃やしておられる方の参加を期待すること。

## グループ紹介

### 竜丘無線クラブ

#### 防災訓練初参加

今回は、この程発足した「竜丘アマチュア無線クラブ」を紹介します。

現在、駄科の中平清さんを会長に、四十四名の会員で構成されていますが、そもそもその発端は「竜丘地区自主防災会」からの依頼によるもので、「電波を通じ、会員相互の親睦と無線技術の向上を図ると共に社会への奉仕」を目的に、アマチュア無線愛好家に参加を募り、六月よりスタートしました。アマチュア無線は、ここ数年趣味としての人気も高く、愛好者も増加傾向にあ

ります。会員の年齢層も幅広く、無線歴も一、二年の人から、二十四年と言うベテランまでまちまちです。

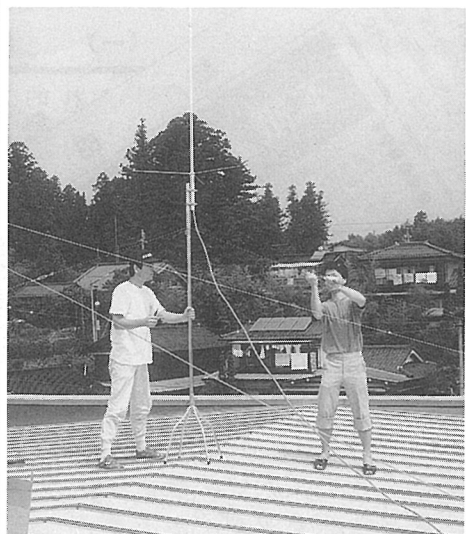
主な活動としては、災害の際に有線機関の使用が不可となった場合や、無い場所での連絡手段として活躍する予定です。

去る九月一日の「防災の日」には、防災訓練と並行して、あってほしくない有事の際を想定した連絡網の徹底を行いました。しかし、各地区により日程が違った為には総合的な訓練という訳にはいかなかった様です。今後の課題としては、少

ない予算を有効に利用して、アンテナ、無線機、発電機などの、設備面での充実を図りたいとの事です。又大規模な災害に備える意味で将来的には、飯田市内の各地域を総括した無線連絡体系を確立する様に活動していきたいとの事です。ボランティアとしての要

素もある為、無理に勧める訳にはいきませんが、入金金、会費なしです。入会希望者は事務局長の武田賢一さん(駄科)まで連絡を。余談になりますが、「竜丘アマチュア無線クラブ誕生」という見出しの記事が信州日報に掲載されたそうです。今後一層の活躍を期待します。

素もある為、無理に勧める訳にはいきませんが、入金金、会費なしです。入会希望者は事務局長の武田賢一さん(駄科)まで連絡を。余談になりますが、「竜丘アマチュア無線クラブ誕生」という見出しの記事が信州日報に掲載されたそうです。今後一層の活躍を期待します。



支所にアンテナを立てるクラブ員

今年度は県大会の日程が繰り上がった為、練習が五月二十一日からと、例年より早まり、練習当初は夜風が肌寒く感じられましたが、各団員は熱心に練習に取り組んでいました。

しかし、仕事等が忙しく残業等により、「なかなかメンバーがそろわない。」「と言った声が聞かれ、消防団活動の難しさや、団員確保の大変さも、この辺に大きな原因があるのではないのでしょうか。

今年の梅雨は、空梅雨の為、例年になく雨天中止が少なく、練習も順調に進み、新入団員も苦勞しながら技

術の習得・向上に頑張っている姿が印象的でした。当日は、早朝から分団本部員と各責任班長によって、会場準備がされ、午後より各班代表の二チーム、計十チームによって、競技がされました。

延べ二十日間の練習の成果が充分発揮されたチームや、残念ながらもったチームもありましたが、盛大に大会は終了し、結果は次の通りです。

- ・ 総合優勝 桐林班
- ・ 一位 桐林 A
- ・ 二位 時又 A

七月八日市操法大会が、東中にて行なわれ、ラッパ班が五位に入る等代表となった時又、桐林、駄科班共、昨年を上回る好成绩を納める事が出来た事を報告させていただきます。

## 訓練の成果 操法大会

その中で、火災時に備える基本的な技術の習得を主目的にした操法技術大会が六月二十四日に竜丘小学校グラウンドで行なわれました。

より実践的な水出し操法になって三年目の今年には、各班長を中心に、練習の準備等、慣れたものでスムーズに行なう事が出来たようです。

八月二十六日に行われた第一講は、飯田市美術館博物館で行われた企画展「伊那谷の昆虫」の見学学習を行い、阿南高校の岩崎靖先生から「伊那谷の昆虫と伊那谷の自然環

境」について説明を受けました。

第二講は、九月十三日に同じく岩崎先生を講師に、水生生物による河川の水質調査」の概略と調査法について学習しました。この調査は、川にいる生物が、ある一定の水質を好んで生息している特徴を利用して行うもので、川底をさらって生物を採取し、それを分類統計することで、その川の水がきれいかわ汚いかを判定するというものです。この日は、岩崎先生にお持ちいただいた生物を実際にルーペを使って分類する練習もしました。

続き第三講は、九月二十四日に竜丘小学校グラウンドで行なわれました。

また、十月二十一日に聞かれた第四講では、第二講で学んだ「水生生物による河川の水質調査」を、区内内九河川二十三地点で実施

## 虫に学ぶ地域環境講座開催

公民館では、本年度事業として「虫に学ぶ地域環境講座」を実施しています。

この講座は、身近なところにも生息する生きものや自然に触れ親しみながら、自分たちの住む地域の環境状態を知ること

を目的に開かれ、小学生からお年寄りまで四十二名が熱心に受講して

八月二十六日に行われた第一講は、飯田市美術館博物館で行われた企画展「伊那谷の昆虫」の見学学習を行い、阿南高校の岩崎靖先生から「伊那谷の昆虫と伊那谷の自然環

境」について説明を受けました。

第二講は、九月十三日に同じく岩崎先生を講師に、水生生物による河川の水質調査」の概略と調査法について学習しました。この調査は、川にいる生物が、ある一定の水質を好んで生息している特徴を利用して行うもので、川底をさらって生物を採取し、それを分類統計することで、その川の水がきれいかわ汚いかを判定するというものです。この日は、岩崎先生にお持ちいただいた生物を実際にルーペを使って分類する練習もしました。



第1講「昆虫展」の見学学習

## 発刊

### 村のみちしるべ

竜丘にある歴史、文化、自然等の様々な地域素材をイラストマップ入りで紹介した「村のみちしるべ」(竜丘ふるさと教材)がこの程全戸に配布された。

この冊子は、昨年度の公民館事業で作成されたもので、古墳を考える会の会員を中心とする約七十名が各項目を分担して作り上げた文字通り「手づくりの冊子」である。それぞれが多忙の中をぬって頻りに集まりを持ち、資料収集、現地確認、執筆、割り付け等に当たったが、仕上げまでにはかなりの苦勞を要している。

冊子では古墳、自然散策、名所・旧跡、みちくさ、施設、水の六つの目的別コー

ス毎に様々な地域素材がわかりやすく説明されており、まさに竜丘の教科書とも言える。



発刊された「村のみちしるべ」

の様々な場で地域学習が行なわれることを期待したい。また、急速に変貌している竜丘地区ではあるが、この冊子で紹介されているような地域固有の素材と、これら素材の宝庫である「竜丘」をいつまでも皆で守り伝えることが大切ではないだろうか。